

厚生労働科学研究費補助金

循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業

未成年者の喫煙実態状況に関する調査研究

平成18年度 総括研究報告書

主任研究者 林 謙治 国立保健医療科学院次長

平成19年（2007）3月

目 次

ページ

I	総括研究報告書	
	未成年者の喫煙実態状況に関する調査研究	
	林 謙治	1
II	分担研究報告書	
	1. 医学、歯学、看護学、栄養学の大学生の喫煙実態に関する調査	
	林 謙治	6
	2. 未成年者の喫煙を取り巻く環境に関する調査研究	
	尾崎 米厚	24
	3. 医学・看護学生の喫煙およびその関連要因に関するフォーカス グループインタビュー調査	
	福田 吉治	35
	4. わが国における妊産婦の喫煙・飲酒に関する疫学研究	
	大井田 隆	55
	5. 未成年者を含むたばこ対策に関する意識等に関する実態調査	
	吉見 逸郎	81
III	2005年度調査結果未収録分	
	お酒とタバコについての全国調査	117

厚生労働科学研究費補助金
(循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業)
(総括・分担) 研究報告書

未成年者の喫煙実態状況に関する調査研究

(主任研究者) 林 謙治 国立保健医療科学院次長

研究要旨

平成12年の健康日本21で未成年者の喫煙率を0にする目標を立て、平成15年の健康増進法で非喫煙者を受動喫煙の害から守る方策を推進し、対策の強化を求められるようになった。本研究では上記の実態をモニタリングおよびリスク因子を同定するために全国代表性のある大規模調査を含め、①2004年度の中高校生喫煙実態の再分析②青少年がよく読む漫画雑誌の喫煙シーン実態と動向を調査③妊婦喫煙の実態に関する調査④医学、歯学、看護学、栄養学の在学生の喫煙実態に関する調査⑤たばこの価格弾力性に関する調査、以上5つの調査をおこなったので報告する。

分担研究者

聖徳大学人文学部 簗輪眞澄
国立療養所久里浜病院精神科
鈴木健二
国立精神・神経センター精神保健研究所
和田 清
福島県立医科大学衛生学 福島哲仁
日本大学医学部公衆衛生学 大井田隆
鳥取大学医学部環境予防医学分野
尾崎米厚

研究協力者

日本大学医学部公衆衛生学 兼板佳孝
福島県立医科大学衛生学 神田秀幸
国立保健医療科学院 吉見逸郎
国立保健医療科学院 福田吉治

A. 研究目的

平成16年度に開始した本研究は最終年度にあたり、過去のデータを再分析すると共に追加調査を行った。再分析した内容は①2004年度の中高校生喫煙実態の再分析②青少年がよく読む漫画雑誌の喫煙シーンの実態と動向の調査、以上2つである。平成17年度の調査であるが分析に要した時間の関係で今年度報告となったのは③妊婦喫煙の実態に関する調査、また、今年度行った調査として④医学、歯学、看護学、栄養学の在学生の喫煙実態に関する調査及び⑤たばこの価格弾力性に関する調査の2つである。

B. 研究方法

①と②については以前報告しているので詳細は省略する。③については社団法人 日本産婦人科医会の調査定点940か所の産科医療機関のうち、最終的に調査協力の得られた全国344か所で実施した。対象者は当該産科医療機関を受診した女性のうち、「妊娠の確定した再診の妊婦」とし、初診の者、妊娠未確定の者、妊娠の継続を望まない者は除いた。無記名自記式の質問票

を用いて、待ち時間に各自に回答してもらい、密封封筒により回収した。回答数は19,650で、全てを有効回答として解析の対象とした。④は全国の医学、歯学、看護学、栄養学の学部もしくは学科を持つ大学を15-30校の範囲内で無作為に抽出し、それぞれ19,8,28,13校から協力が得られた。対象は主に4年生とし、喫煙・飲酒の状況および予備職業人としての態度・意識について質問表を作成し調査した。回答数は6,312であった。その結果から今後の喫煙予防および禁煙教育のあり方を具体的に検討するために、複数の大学において医学、看護学生を対象に喫煙行動に至るまでのプロセスを探り、喫煙意識とその関連要因を把握する目的でフォーカスグループインタビューを行った。⑤では財団法人C社の個人オムニバス調査を活用し、平成19年1月～3月の各調査において、喫煙率はじめタバコの価格弾力性のほか健康影響の周知度や規制への反応等を広く調査した。

C. 結果と考察

1. 全国調査によると、男女とも学年が上がるにつれ月喫煙者率（この30日に1度でも喫煙したもの＝中高生の喫煙者と定義）は上昇した。月喫煙者率は中学男子で、1996年10.9%、2000年9.4%、2004年5.1%、中学女子はそれぞれ、4.9%、5.6%、3.6%、高校男子は、30.7%、29.9%、15.9%、高校女子は、12.6%、13.1%、8.2%であった。男女、中高とも2004年では、喫煙率の劇的低下が確認された。中高生の喫煙行動の関連要因をみると、中高生の喫煙者は、周囲の者の喫煙、食生活などの生活習慣の問題、クラブ活動などの学校生活の問題を有し、一般に望ましくないと考えられている生活習慣をより多く身につけている。2005年度において喫煙激減を再確認するために2000年度調査と同一の学校を抽出し、調査の結果激減傾向にあることが確認できた。

2. 中高生がよく読む漫画雑誌に多くの喫煙シーンが存在することが明らかになった。未成年者は、読む雑誌を通して喫煙シーンに曝露されていることが明らかになった。また、2004年

全国調査の再分析により、中学生男子等では喫煙シーンの多い雑誌を読むことと喫煙行動が関連することが示唆された。今後は、作者、出版社へ喫煙シーンをなくすよう要望する必要がある。

3. 妊娠前喫煙率は22.9%で、妊娠がわかってからの喫煙率（妊娠中喫煙率）は7.8%であった。妊娠前喫煙者の67.9%は妊娠を機に禁煙していた。禁煙は妊娠初期の段階で行われていると推測された。妊娠中喫煙者も82.1%は妊娠前に比べ喫煙本数を減らしており、約97%は禁煙・節煙の意思を表していた。最終学歴が高くなるにつれ妊娠前・妊娠中喫煙率は低くなる傾向があった。回答者の約2分の1は日常的に受動喫煙しており、その場合の喫煙者は夫が8割であった。

4-1. 全国の医学、歯学、看護学、栄養学を専攻する4年生を対象に行った質問表による調査の結果は次の通りである。1)喫煙経験がある割合をみると歯学生がもっとも高く(49.2%)、次いで医学生(36.9%)、看護学生(27.0%)

であり、栄養学生(21.9%)がもっとも低い。2)専攻別の現在の喫煙状況については上記喫煙経験の割合と同じ序列であった。毎日吸う、時々吸う双方の合計は歯学生28%、医学生14.6%、看護学生9.7%、栄養学生6.9%であった。3)それぞれ専攻の立場から喫煙についてどう思うかの質問に対して吸うべきでないとする割合は栄養学生がもっとも高く(74.5%)、次いで医学生、歯学生はほぼ同率(69%)であり、看護学生はこのなかでもっとも寛容的であった(56.5%)。4)患者の喫煙について患者の自由に委ねるべきとする割合は歯学生が最も高く(46.8%)、看護学生と医学生はほぼ同率で(32%前後)、栄養学生はもっとも厳しくであった(16.2%)。

4-2 医学、看護学生を対象に行ったフォーカスグループインタビュー調査では喫煙促進要因として「ストレスへの対処」、「生活習慣化」、「他者とのコミュニケーション」、「タバコへのイメージ」、「タバコ許容の社会的メッセージ」、「個人の自由」が導出された。他方、禁煙促進要因として「喫煙意図」、「教育意識」、「経済的負担」、「自分へのリスク影響」、「他

者へのリスク影響」、「患者への影響」が導出された。

5. 成人喫煙率について、24.9%で、男性40.5%。女性12.0%であった(n=2681)。これは平成17年度実施の国民生活基礎調査(全体28.5%、男性44.9%、女性13.5%)よりも低い。たばこ1箱の価格が1000円の場合、男性のほうが女性に比べて喫煙をやめると答えている割合が高く、年齢別にみると男性では年齢が高いほどやめる割合が低く、女性は逆にやめる割合が高い。

D. 結論

わが国には、未成年喫煙禁止法があるにもかかわらず、中高生にはすでに多くの喫煙者がいることがわかっている。成人の喫煙者に尋ねても、未成年のうちから喫煙を解していたと回答するものの割合は高い。成人の喫煙率を下げるためには、喫煙者への禁煙指導の普及が重要であるが、近年の画期的治療方法であるニコチン置換療法をもってしても、治療に結びついた人のうち約2割しか長期禁煙には成功していない。すなわち、8割は失敗しており、ニコチン依存症のしつこさを思い知らされる。したがって、そもそ

も吸い始めない喫煙防止が極めて重要であるといえ、多くの喫煙者が喫煙を開始する思春期が重要な時期となる。

妊産婦は禁煙する動機付けができていない人が多いので、この集団に働きかける意義が大きい。青少年の喫煙はとくに母親の影響を受けやすいことが明らかになっているので喫煙予備軍を減少させる意味でも妊産婦禁煙の推進は長期対策上大きな効果を期待できる。

医療関連の学生については歯学生、医学生の喫煙率が高く、看護学生と栄養学生が相対的に低い。専攻科の男女割合構成が影響している可能性がある。男女別についても集計をおこなったが、基本的な項目については性別よりも学科別による違いが顕著であった。詳細については分担報告書のなかで述べるが、それぞれの専攻がそのまま将来の職業とつながることを考えると学科別の実態のほうが意味があると思われる。歯学生は本人の喫煙率ばかりでなく、患者の喫煙についてももっとも寛容的である。本邦はじめての調査として重要な資料であり、今後の対策に生かしていきたい。

たばこ価格の値上げは比較的年齢の若い男性の喫煙中止に有効であることが判明した。

E. 研究発表（論文発表）

1) Osaki Y, Tanihata T, Ohida T et al. Adolescent smoking behavior and cigarette brand preference in Japan. *Tobacco Control* 2006; 15: 172-180.

2) Kaneita Y, Ohida T, Osaki Y et al. Insomnia among Japanese Adolescents: A Nationwide Representative Survey, *Sleep* (in press).

3) Suzuki K, Ohida T, Yokoyama E et al. nationwide survey, *JAN* 2005, 49; 268-275.

4) Kaneita Y, Ohida T, Takemura S et al. Relation of smoking and drinking to sleep disturbance among Japanese pregnant women, *Pre Med* 2005, 41; 877-882.

5) Osaki Y, Mei J, Tanihata T et al. Cigarette brand preferences of smokers among university students in Japan. *Preventive Medicine* 2004;38(3):338-342.

6) 大井田隆、曾根智史、武村真治他
：わが国における妊婦の喫煙状況、*日本公衛誌*、54(2)、115-122、2007

厚生労働科学研究費補助金
(循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業)
(分担) 研究報告書

医学、歯学、看護学、栄養学の大学生の喫煙実態に関する調査

主任研究者	林 謙治	国立保健医療科学院次長
分担研究者	大井田 隆	日本大学医学部教授
	尾崎米厚	鳥取大学医学部助教授
研究協力者	宮里和子	武蔵看護大学教授
	大嶺智子	杏林大学保健学部教授
	宮城重二	女子栄養大学栄養学部教授
	尾崎哲則	日本大学歯学部教授
	兼板佳孝	日本大学医学部講師
	玉城哲雄	日本大学医学部助手

研究要旨

全国の医学、歯学、看護学、栄養学の学部もしくは学科を持つ大学を15-30校の範囲内で無作為に抽出し、それぞれ19, 8, 28, 13校から協力が得られた。対象は主に4年生とし、喫煙・飲酒の状況および予備職業人としての態度・意識について質問表を作成し調査した。回答数は6, 312であった。結果は次の通りである。

1) 喫煙経験がある割合をみると歯学生がもっとも高く(49.3%)、次いで医学生(36.7%)、看護学生(27.0%)であり、栄養学生(21.9%)がもっとも低い。2) 専攻別の現在の喫煙状況については上記喫煙経験の割合と同じ序列であった。毎日吸う、時々吸う双方の合計は歯学生28%、医学生14.6%、看護学生9.7%、栄養学生6.9%であった。3) それぞれ専攻の立場から喫煙についてどう思うかの質問に対して吸うべきでないとする割合は栄養学生がもっとも高く(74.5%)、次いで医学生、歯学生はほぼ同率(69%)であり、看護学生はこのなかでもっとも寛容的であった(56.5%)。4) 患者の喫煙について患者の自由に委ねるべきとする割合は歯学生が最も高く(46.8%)、看護学生と医学生はほぼ同率で(32%前後)、栄養学生はもっとも厳しいことが明らかになった(16.2%)。

A. 研究目的

保健・医療分野の従事者は国民の健康増進に寄与することは本来の責務として当然であるが、自ら危険因子を避けるための用意と自律があつてはじめて説得力を持つことは言うまでもない。しかしながら、喫煙のような危険因子は生活習慣のなかで形成されるので、職業人として専門職に就く前に望ましくない生活習慣をたちきることが重要である。

従来、喫煙に関して歯学部を除いた医学、看護学、栄養学大学生を対象とした小規模調査はしばしば行われてきたところであるが、医療関連分野の学部生を対象に比較可能な形で行った大規模の全国調査は本調査がはじめてである。特に歯学部については筆者の知るところ信頼できる一定規模以上の調査は見あたらない。

学部比較によってそれぞれの特徴が一層浮き彫りにされるばかりでなく、学内対策の問題点をより具体的に提案することができると思われる。

B. 研究方法

全国の医学、歯学、看護学、栄養学の学部もしくは学科を持つ大学を15-30校の範囲内で無作為に抽出し、それぞれ19, 8, 28, 13校から協力が得られた。対象は主に4年生とし、喫煙・飲酒の状況および予備職業人としての態度・意識について質問表を作成し調査した。医学部の質問票の内容は一部異なるが、基本的事項についてはすべて同じである。

回答数であるが、医学部は1,590、

歯学部677、看護学部2,545、栄養学部1,500であり、総回答数は6,312であった。なお、本研究は国立保健医療科学院の研究倫理委員会の承認を平成18年11月1日に受けた。

C. 結果および考察

喫煙に関する学部別・男女別にみた基本的な資料を図1-18に示した。まず現在の喫煙率(図1)についてみると、男女ともに歯学生がもっとも高く、それぞれ62%、35%であり、次いで看護学生では47%、30%、栄養学生は40%、25%、医学生39%、23%の順であった。喫煙率の高い学部では男女ともやはり高率であり、性別による交絡はなかった。過去の喫煙経験率(図2)の学部別・男女別の差異は現在の喫煙率の傾向をほぼ反映しているが、興味深いことに男性は現在の喫煙率よりも過去の喫煙経験率が高く、女性は現在の喫煙率が過去の喫煙経験率より高い。

現在の経験率および過去の喫煙経験率は喫煙開始年齢に影響されると予想されたが、男性については予想通りであったが、女性については必ずしもその傾向がみいだされなかった(図3-4)。このなかでとくに目立ったのは男性医学生の喫煙開始年齢がもっとも低く、15歳以下で開始したのは33%であり、他の学部生にくらべ約10%低い。女性についても若干同様な傾向がみられた。

過去に喫煙経験のある者のうちでも「6ヶ月以上にわたって毎日喫煙した」経験率は歯学生では男女とも顕著に高率であり、男性67%、女性42%と他

学部の同性に比べそれぞれ20%高い(図5)。「6ヶ月以上にわたって毎日喫煙した」ことを「喫煙が習慣になった」と定義し、習慣になった年齢をたずねたところ15歳以下では男女とも歯学生に次いで栄養学生が高く、いずれも12-19%程度であった(図6-7)。

以上に引き続き、現在の喫煙者に対し、「ニコチン依存症」と判断される指標となる幾つかの質問結果を紹介したい。第1に「起床30分以内の喫煙」割合は医学生58%を筆頭に歯学生53%、そして看護学生の29%は栄養学生の24%よりやや高い。男女別では女性の医学生は男性の医学生より高く66%であり、女性の歯学生は男性の歯学生より低いながらも40%を超えており、看護・栄養学の女性(28%、22%)よりかなり高い(図8)。「ニコチン依存症」と関連した質問において「他の時間より午前中に喫煙する」、「いつも深く吸い込む」、「高ニコチン銘柄の嗜好」、「禁煙場所は耐え難い」などの割合についていずれも同じ傾向にあった(図9-12)。なお、喫煙者の禁煙希望割合では男女とも看護学生が低く40%台であった。その他の学部についてはほぼ同率で55%前後であった(図13)。

将来医療専門職につくという立場との関連で3つの質問をした。「自分が病気のときでも喫煙するか」に対し、医学生の男性、歯学生の男性・女性双方の「喫煙する」の割合が目立って高く、いずれも20%台後半に達し、他学部の男女の約倍であった(図14)。先の「ニコチン依存症」の傾向とよく似

ていることから考えると、職業的な自覚だけでは乗り越えがたい問題が潜在化している可能性がある。ちなみに「看護・栄養・医学・歯学生の立場上喫煙してはならないと思うか」の質問については医学・歯学及び栄養学生は「喫煙すべきでない」とする割合は高く65-78%に達するが、逆に看護学生は4学部のうちもっとも低く50%台であった(図15)。「患者は喫煙すべきでないと思うか」の質問では学部にかかわらず「喫煙すべきでない」と答える割合は女性、とりわけ栄養学生に高く(66%)、看護学生がもっとも低い(36%)。男性についてはやはり看護学生がもっとも寛容的であったが(26%)、他学部ではほぼ30%台で横並びであった(図16)。

D. 結論

看護・栄養・医学・歯学生の比較で明らかになったことは喫煙率および将来医療専門職としての態度は性差よりも学部の差が目立っており、とくに歯学部、次いで医学部に多くの問題を抱えていることが明らかになった。両学部は喫煙率が高いばかりではなく、「ニコチン依存症」が高率であることが示唆された。将来の職業人としての自覚は相対的に高いが、上記の事情により自己矛盾に陥っていることが伺われた。

E. 研究発表

なし

圖1 男女別喫煙率(%)

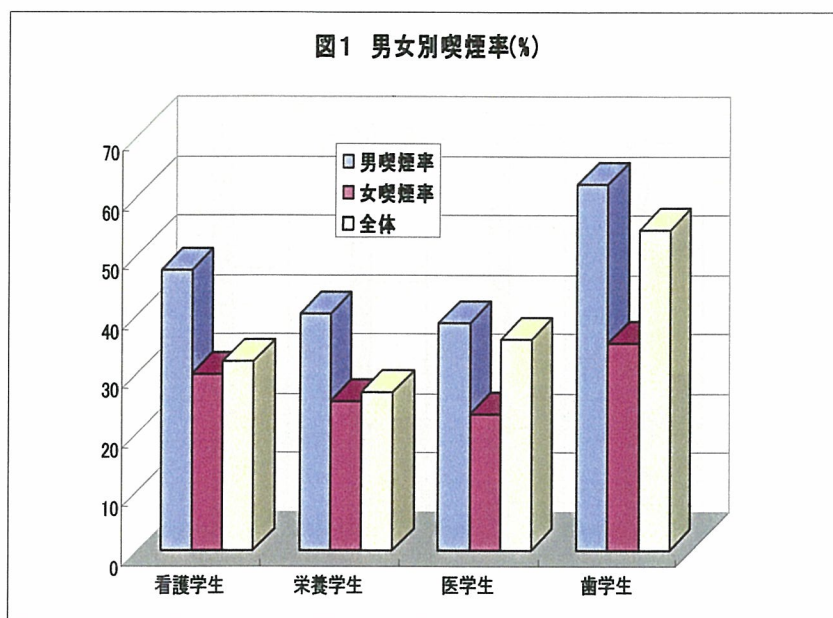


圖2 男女別喫煙経験率(%)

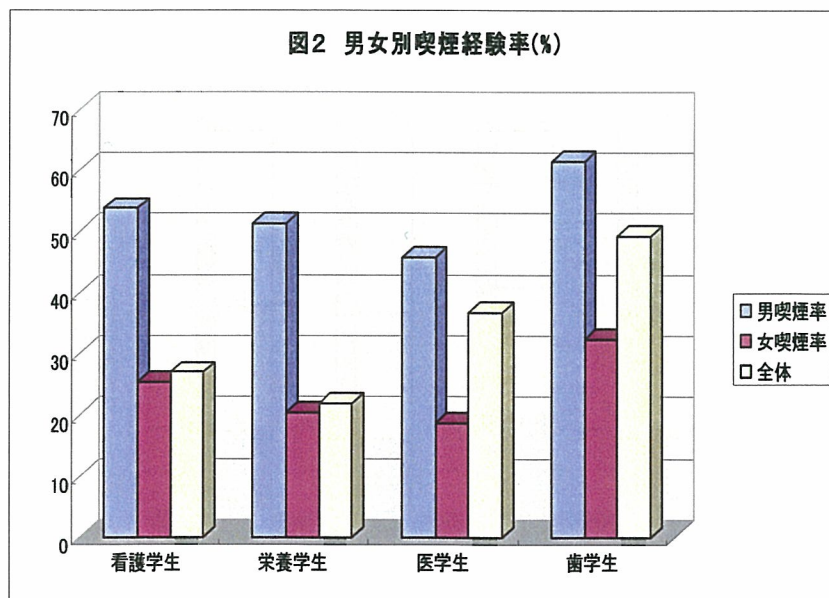


图3 喫煙開始年齢(男)(%)

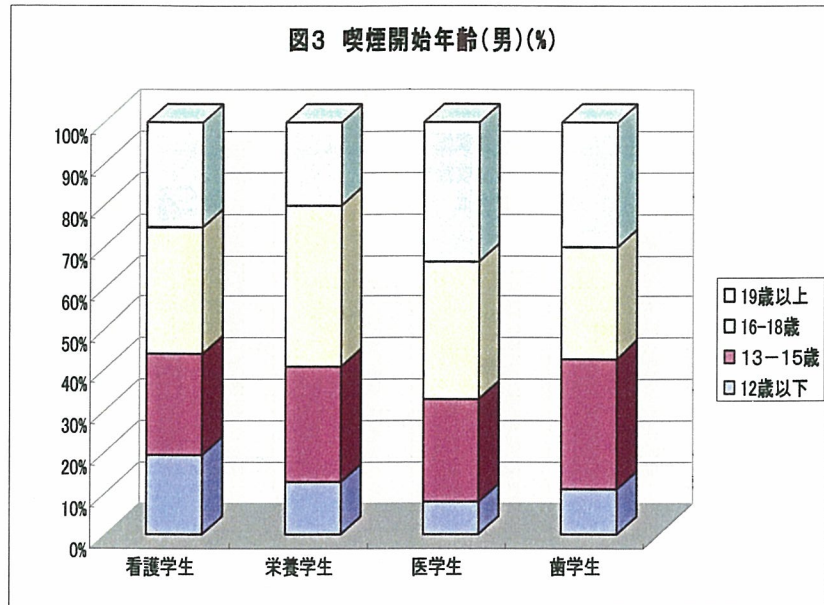


图4 喫煙開始年齢(女)(%)

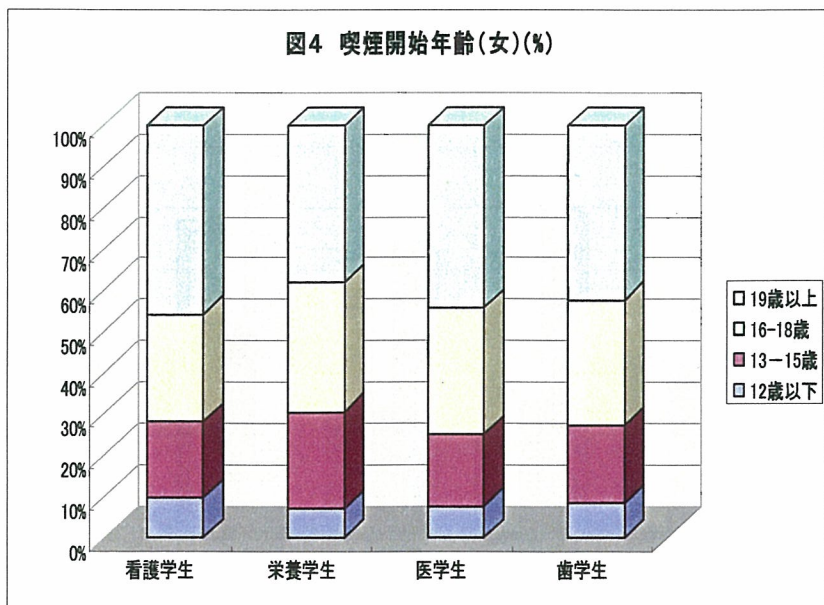


図5 6ヶ月以上にわたって毎日喫煙した経験率(%)

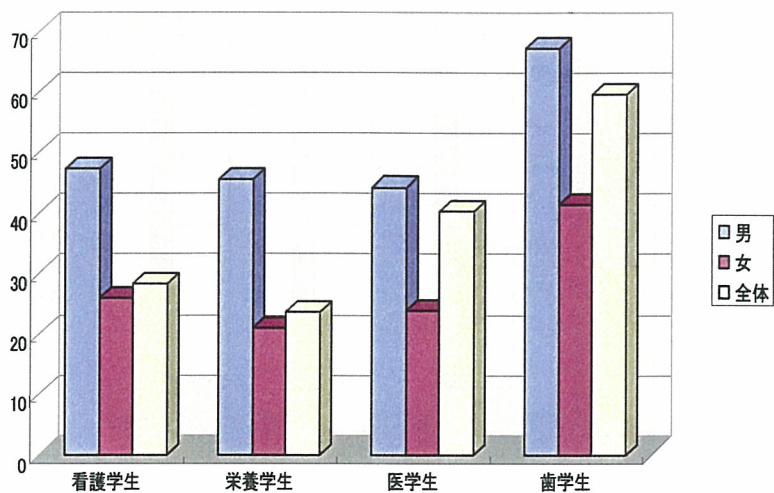


図6 喫煙が習慣になった年齢(男)(%)

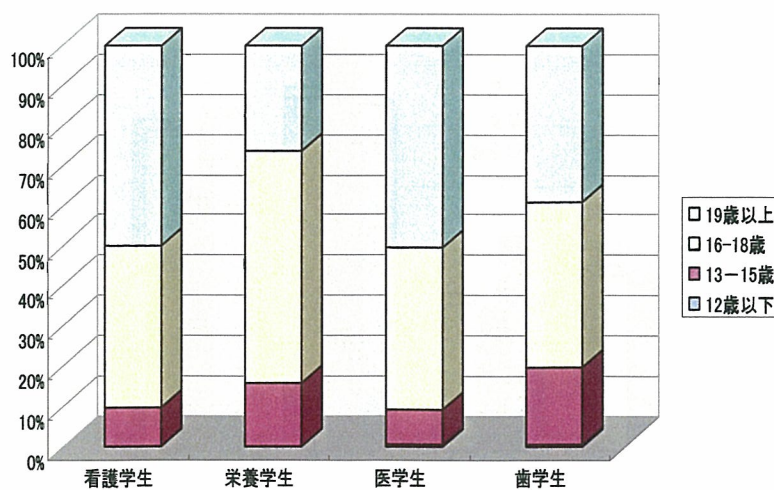


図7 喫煙が習慣になった年齢(女)(%)

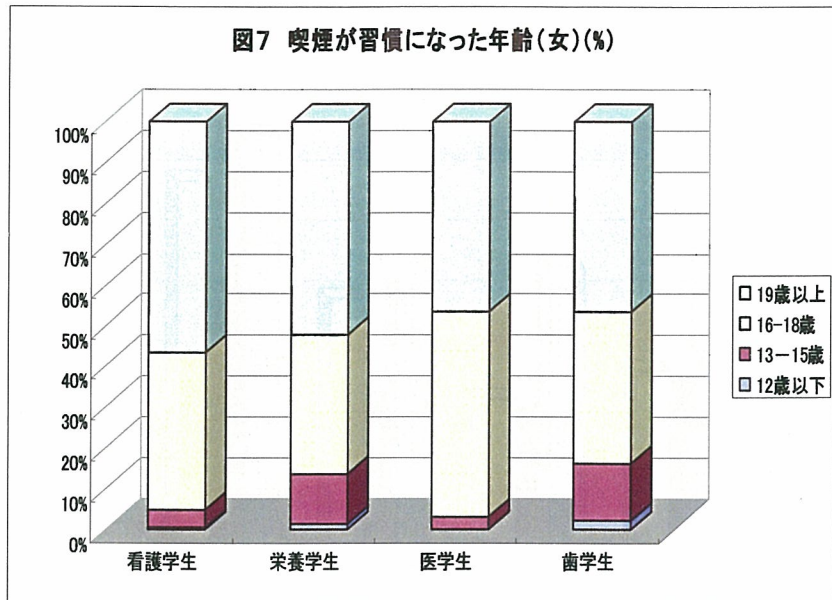


図8 起床30分以内の喫煙割合(%)

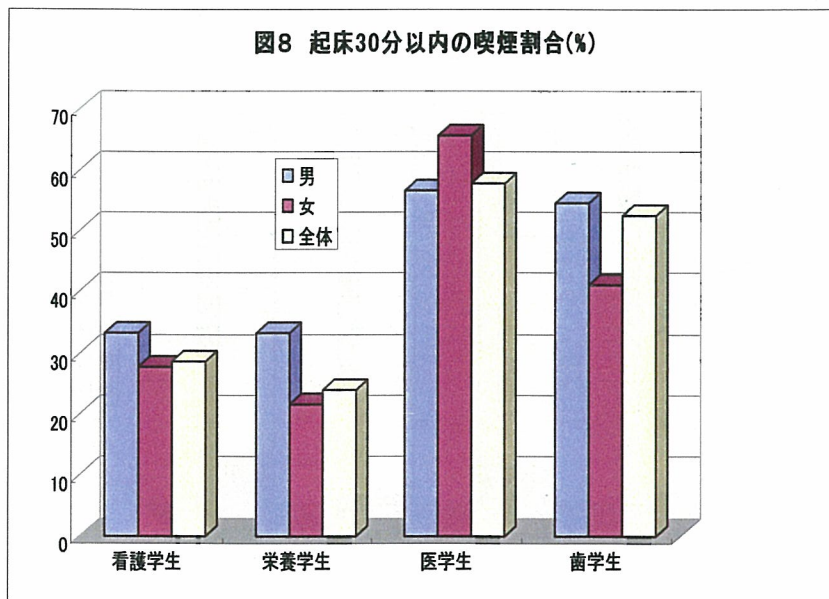


図9 他の時間より午前中に喫煙する割合が高い(%)

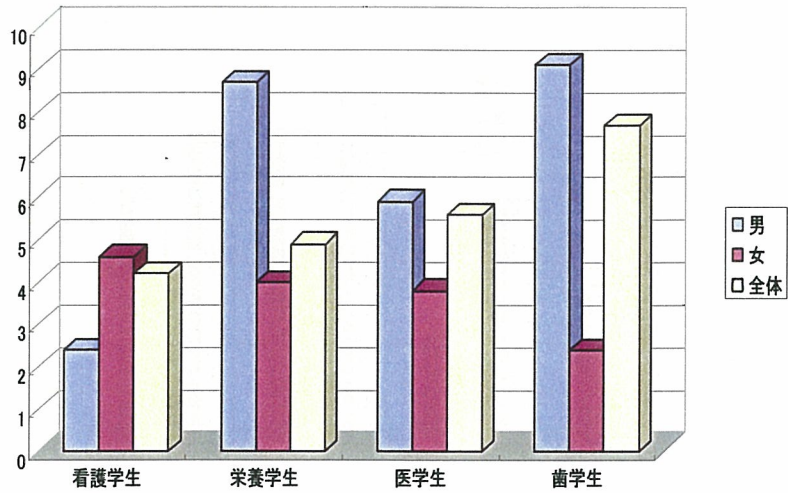
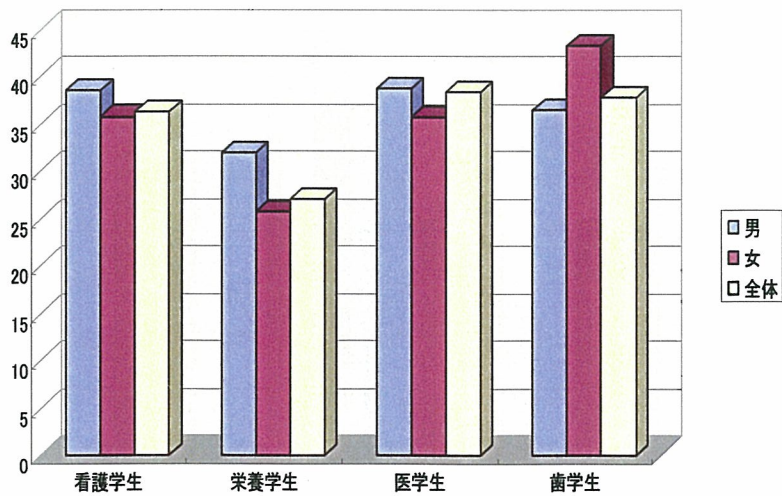


図10 いつも深く吸い込む割合(%)



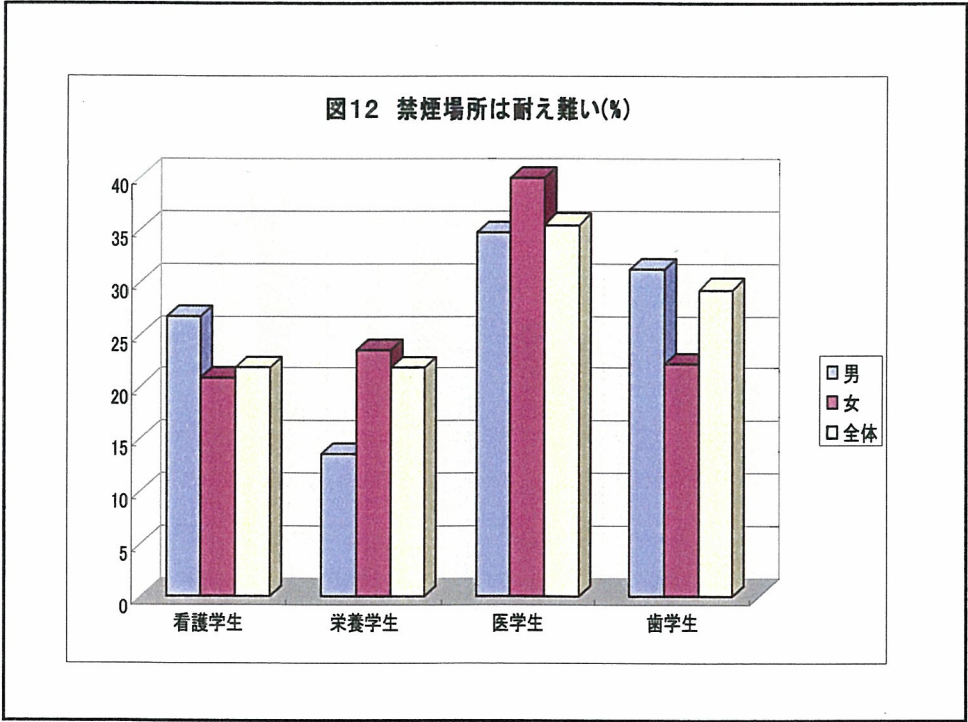
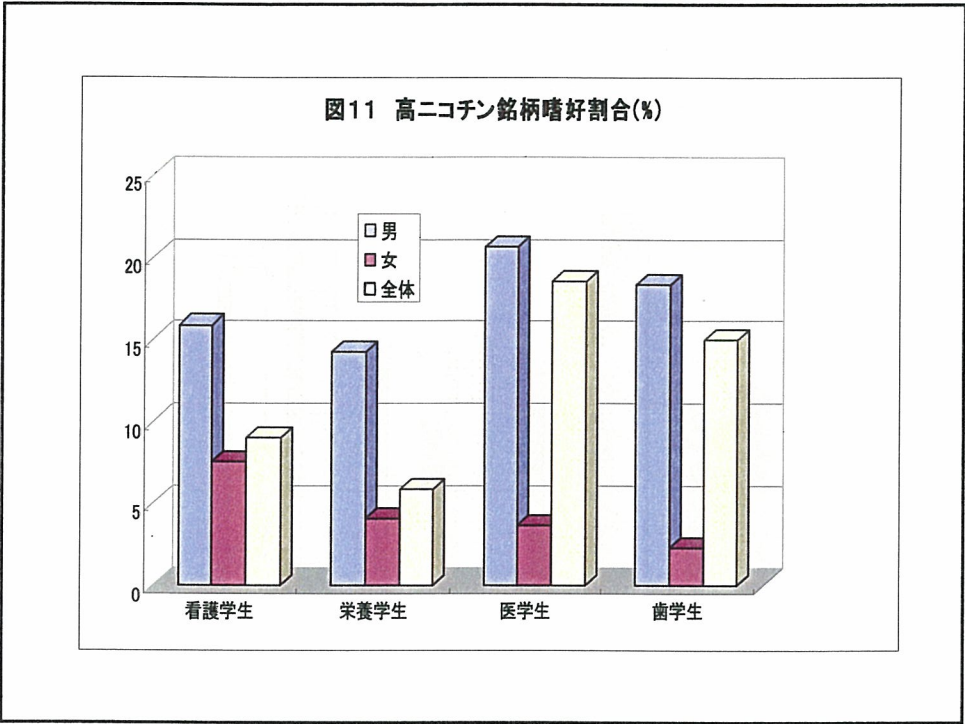


図13 禁煙した年齢(男)(%)

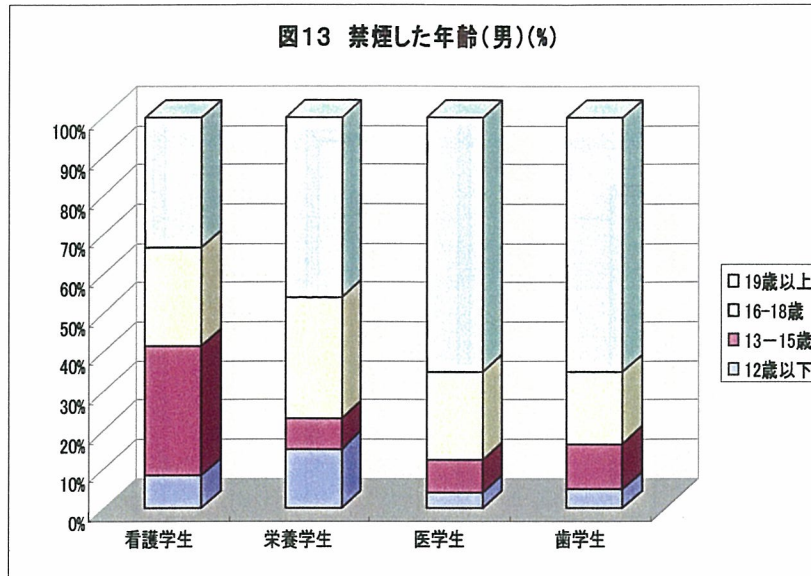


図14 禁煙した年齢(女)(%)

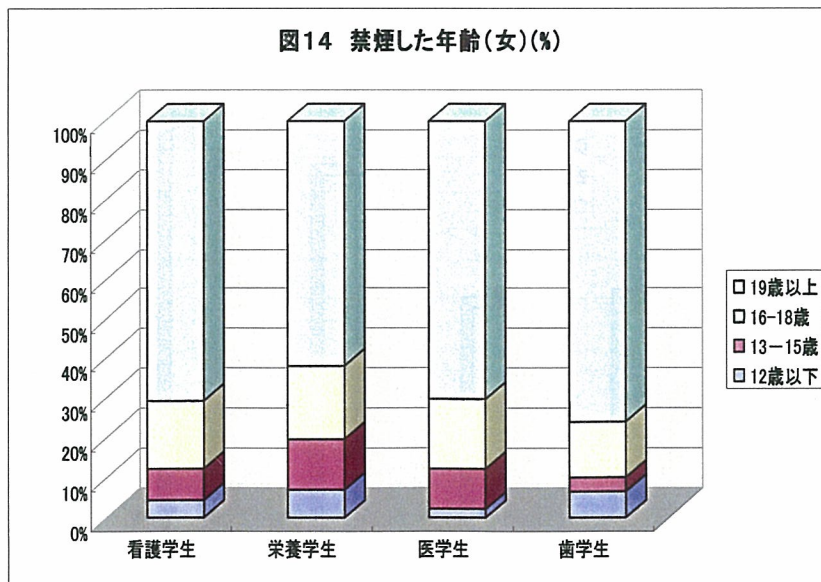


図15 禁煙希望割合(%)

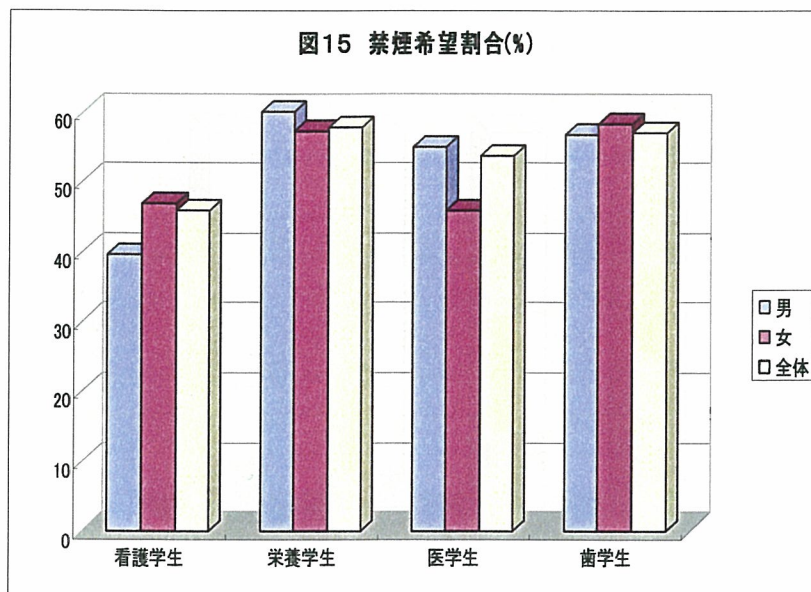


図16 病気のときでも喫煙する(%)

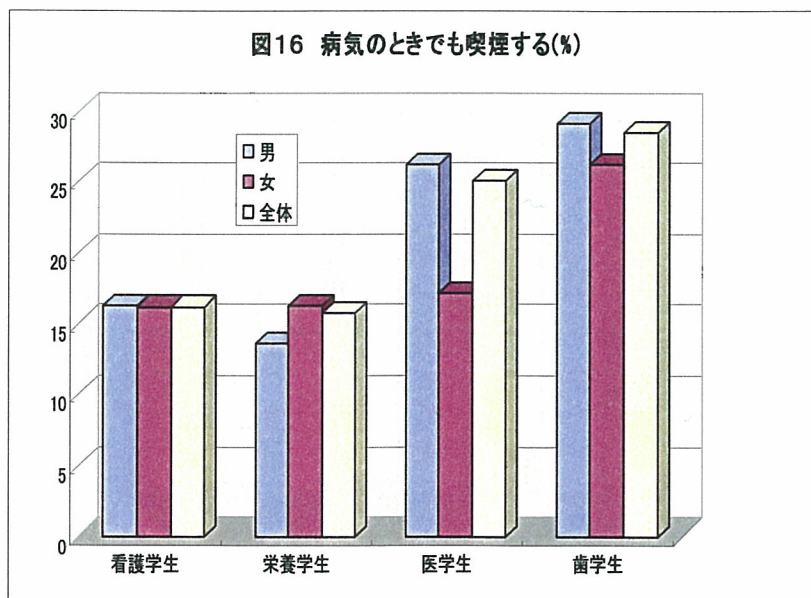


図17 看護・栄養・医学・歯学生の立場上喫煙はしてならない

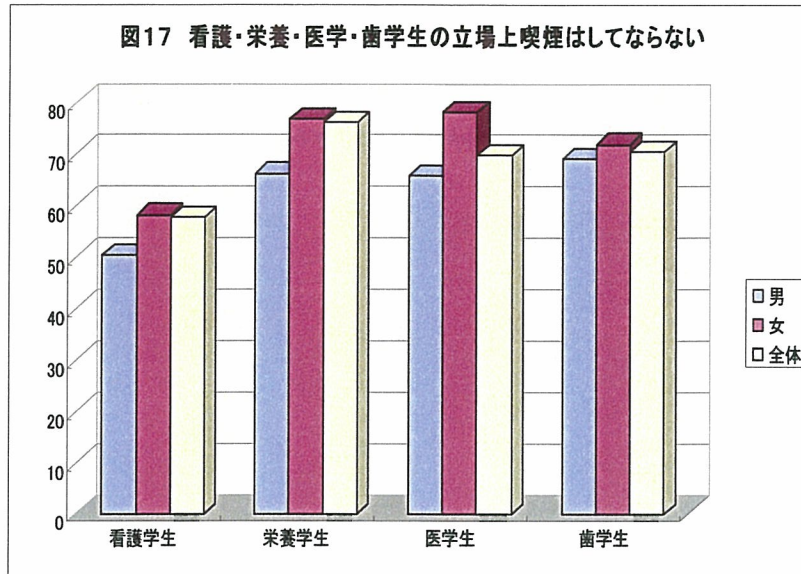
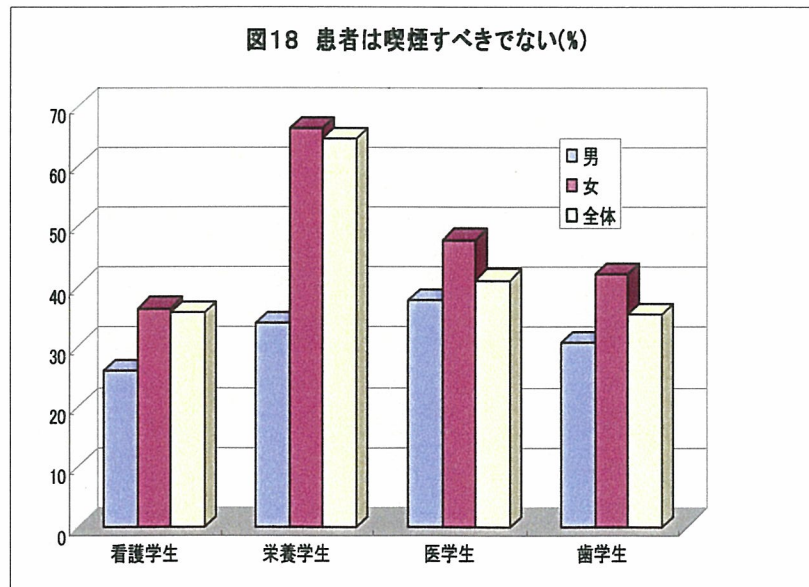


図18 患者は喫煙すべきでない(%)



我が国の栄養学部学生の喫煙及び関連要因に関する調査

本調査は、厚生労働省所管の国立保健医療科学院が世界保健機関と米国疾病予防センター(WHO/CDC)の依頼を受け、栄養学部学生の喫煙行動、および喫煙関連要因等の状況を調べ、今後の公衆衛生活動に活かすことを目的に実施されます。全国の栄養学部の中から無作為に20大学を抽出したところあなたが在学している栄養学部が選ばれ、調査をお願いすることになりました。同封のアンケート調査票にご記入の上、調査用封筒に入れて下さいますようお願い申し上げます。お答えになった内容につきましては、個人及び在籍されている大学のプライバシーを守り、結果の公表は集計表の形でいきますので、ありのままをお答え下さいますようお願いいたします。

注)ここで栄養学部とは管理栄養士養成の4年制大学とお考え下さい。

◆記入上の手引き:

- 1.調査票にお名前を記入していただく必要はありません。
 - 2.直接在籍されている大学の教職員等が見ることはありませんので、ありのままをお答え下さい。
 - 3.調査票は記入後、同封した封筒に入れ、密封した状態で回収します。
- 以上よろしく願いいたします。本調査につきまして質問のある方は下記までお願いします。

調査代表者: 厚生労働省 国立保健医療科学院 次長 林 謙治
〒351-197 埼玉県和光市南2-3-6
調査調整者: 女子栄養大学 宮城重二教授
〒350-0288 埼玉県坂戸市千代田3-9-21
TEL 049-284-2861 FAX 049-284-2861
E-mail miyagi@eiyo.ac.jp

★下記の問いにあてはまる答の番号に○をつけ、()の中は適当な数字を記入して下さい。

⑩=1

- (質問1) 今までに1本でもたばこを吸ったことがありますか？
1. いいえ → 質問12に進んでください
 2. はい(はじめて吸ったのは 歳頃) ⑪⑫⑬
- (質問2) 6ヶ月以上にわたって毎日たばこを吸っていたことがありますか？
1. いいえ
 2. はい → 習慣になったのは(歳頃) ⑭⑮⑯
- (質問3-1) 現在たばこを吸いますか？
1. 毎日吸う()本位
 2. 時々吸う程度
 3. 全く吸わない → やめたのは(歳頃) ⑰～・
- (質問3-2) 質問3-1で1.「毎日吸う」
2.「時々吸う程度」に○をつけた方
→ 現在禁煙したいと思っていますか？
1. いいえ
 2. はい